

図書館だより

目次

フィレンツェのイタリア国立中央図書館と大洪水	
——北村 暁夫	1
著作紹介 藤永康政著『黒人自由闘争のアメリカ史—公民権運動とブラック・パワーの相剋』	——藤永 康政 2
著作紹介 E・P・トムスン著、川端康雄監訳、田中裕介・星野真志・山田雄三・横山千晶訳	
『ウィリアム・モリス——ロマン派から革命家へ』	
——川端 康雄	3
ケルムスコット・プレス版エドマンド・スペンサー著	
『羊飼いの暦』	——川端 康雄 4
文学部×図書館×書店で開く学びの循環	——加藤 玄 6
2025年度夏期スクーリング開館について	
——南木 香織	8



図書館側からみる銀杏並木と百年館

フィレンツェのイタリア国立中央図書館と大洪水

北村 暁夫

前回の図書館だよりで紹介したフィレンツェのイタリア国立中央図書館は、市内を東西に流れるアルノ川にほど近いところにある。今から60年ほど遡る1966年11月4日に、数日来的大雨によってアルノ川が氾濫し、フィレンツェは大洪水に見舞われた。最も高いところでは地面から5メートルの高さまで水が達し、到達地点を示す指標が今でも市内各地に残っている。川沿いに位置する国立図書館も1階部分は一時、完全に水没してしまった。

この図書館の書庫は地下に設置され、所蔵する書籍の大半がこの書庫に置かれていた。水に浸かった書籍の数は100万冊近くに達したという。雨が上がり、水が引くとともに、書物の救出作業が始まった。不幸中の幸いというか、この洪水がテレビで報道されると、ヨーロッパ中から多くの若者が集まり、ボランティアとして市内の災害復旧の活動に従事することとなった。のちに「泥の天使」と呼ばれることになる彼らの活動は、組織による支援ではない、自発的な災害復興支援のはしりとしても知られている。

多くの若者たちの手を借りた人海戦術により、地下の書庫に所蔵されていた書籍はひとまず救出された。とりわけ、稀覯本に関してはただちに修復作業が開始された。長時間水に浸かったことにより密着してしまった紙を一ページずつ慎重にはがし、それを台の上に載せて乾かすという工程が繰り返された。残された写真を見ても、広大な閲覧室に並ぶ長机の上に紙が並べられている様は壮観である。この地道な作業によって、稀覯本の大半は失われずに済むこととなった。

だが、その一方で、修復できずに失われてしまった書籍も多い。私の個人的経験でも、閲覧を申請したけれども、閲覧できなかった事例が多々存在する。ある時などは、申請書に *alluviate* と書き加えられたものが返されたことがあったが、これは「氾濫する、洪水が起きる」という意味の動詞の現在分詞形なので、直訳すれば「氾濫中」ということになる。初めて目にした単語なので最初は何のことかと思ったが、要は大洪水によって閲覧不能となったということである。フィレンツェの国立図書館は、イタリア統一以降に出版された書籍が原則すべて揃っている図書館であり、閲覧したい書籍は本来すべてそこで読めるはずだと思って通うので、閲覧不能の書籍が何冊も出てくると、受ける精神的なダメージは大きいものがある。

それにしても、なぜ国家にとって最も重要な図書館をあえて川沿いに建設したのであろうか。なにしろアルノ川は歴史上、何度も大洪水を起こしているのである。少し調べてみたが、その理由はよくわからず、つくづく不思議に思う。ちなみに、本学の図書館は丘の上に建てられているので、そうした心配は無用であろう。

(館長・史学科教授)

著作紹介 藤永 康政著

『黒人自由闘争のアメリカ史—公民権運動とブラック・パワーの相剋』

藤永 康政

2016年の大統領選挙でドナルド・トランプがアメリカ政治に登場して以来、世界の政治、経済、社会も激しく揺れています。「アメリカ」を語ることが難しい時代に入りました。その変化は、わたしとしては、突然のことにも感じていますし、矛盾するようですが、他方でまた、十分予測できたようにも思います。第二次世界大戦後、アメリカ合衆国は、良かれ悪しかれ、戦後民主主義がモデルとしたものでした。もちろん、「アメリカ帝国主義」に対する批判は大衆運動としても1960年代には活発に展開され、民主主義とは何かをめぐる知的な探究は、つねに自由主義諸国の盟主としての「アメリカ」をひとつの大きな参照先にしていたはずで「日本の民主主義は遅れている、なぜなら、アメリカでは…」というような表現が、テレビの討論番組などで何の疑問もなく発せられていたのは、それほど昔のことではありません。また、「自由の国〈アメリカ〉」に対する素朴な憧れは、若い世代の心を広くつかんだものです。

わたしは、もちろん、そのような時代に育ち、英語が好きになったのも、アメリカが心底大好きだったからです。

ところが、本年度の授業の冒頭で、「アメリカのことを民主主義の手本だと思っている人はどれくらいいますか」と尋ねたところ、首をかしげる模様が目立ち、「では、見倣ってはならないと思っている人は？」と訊くと、ざっと手があがりました。アメリカに理想を見る者の数は年々減っています。それは素直な実感であり、トランプ政権が第二次世界大戦後の世界秩序の抜本的改変に乗り出している以上、リアリティの正確な反映だと感じます。

他方、アメリカ研究の入門書の多くは、大きな問題を抱えているアメリカ社会を批判しつつも、自由主義・民主主義のレジリエンシーに信頼を寄せて書かれているものが大半です（近年、その改訂が急速に進んではいますが…）。現在の若者は、そのような古い世代の無意識の前提を奇妙に感じるのはいまありません。

本書の起稿は、2020年、ブラック・ライヴズ・マター運動が激しく展開された年の冬のことです。つまり、本書の執筆は、上のようなアメリカをめぐる認識が急転回をしている世界を背景に進行していきました。本書はアメリカ研究者を主たる対象とした研究書ではないこともあり、叙述のトーンや内容は、アメリカに関心のある大学生が理解できるものと考えて書いたものです。したがって、執筆しているわたしの目には、学生のみなさんの顔がうっすらと浮かんでいました。世界を混乱させ、自らも混沌に陥っているアメリカを捉えるためには、黒人の闘争が刻んだ歴史がきっと役に立つ、これこそが本書の最も基底にあるわたしの思いです。

本書で語っているのは、黒人の急進的な運動が、どれだけ激しくても前へと進むその姿です。ここには、民主主義の大国アメリカ、本書のテーマにとってより具体的には「夢」、「愛」、「非暴力」を語るキング牧師は現れません。むしろ、キング牧師を登場させずに公民権運動を語ることを目指しています。そうして浮かびあがってくるのは、自由の大国アメリカに飲み込まれ、その臓腑のものとて抵抗を続けた黒人たちの姿です。レイシズムは、本来は「健全」なアメリカ自由主義・民主主義の「病理」なのではなく、むしろ本質である、本書が焦点に当てるラディカルな黒人たちは最終的にそう理解します。このようなかれらかのじよらの軌跡こそ、トランプの時代に生きるわたしたちに何かの「力」を与えてくれるはずだと感じています。

（英文学科・教授）



著作紹介

E・P・トムスン著，川端康雄監訳，田中裕介・星野真志・山田雄三・横山千晶訳『ウィリアム・モリス——ロマン派から革命家へ』 川端 康雄

ウィリアム・モリス（1834-94）については、その多岐にわたる活動を反映して、文学研究、デザイン史、社会思想史ほか、さまざまな専門分野から研究が積み重ねられてきた。とりわけこの30数年間のモリス研究の進捗は目覚ましい。テキストル・デザイン、ステンドグラス、文学研究、古建築物保護、ケルムスコット・プレス、また環境思想などの分野で画期的な研究が続々と出されている。そのなかで、社会主義運動へのモリスの関与を扱った文献も多く出ているのではあるが、今回私たちが翻訳刊行した『ウィリアム・モリス——ロマン派から革命家へ』は、初版刊行が1955年、70年前の著作とはいえ、いまでもその方面での最重要の研究書として位置づけられている。

著者E・P・トムスン（1924-93）はイギリスの歴史家、批評家、アクリティヴィスト。歴史学専攻の方々にとっては主著『イングランド労働者階級の形成』（1963年、邦訳2003年）ほか、社会史研究に重要な貢献を果たした学者として記憶されているであろう。同時にトムスンは1950年代後半に起こり、60年代に盛り上がる「イギリス・ニュー・レフト運動」の中心人物の一人であり、さらに時を経て、冷戦末期の1980年代に、ヨーロッパ核非武装運動（END）を主導する反戦活動家でもあった。冷戦の終結に貢献した最重要人物の一人であったとする評価もある。そして、とりわけトムスンについては、学者と社会運動家という両側面を別次元のものとして切り離すのではなく、歴史学研究によって得られた知見と、政治的コミットメントへの自身の運動原理とが深い所で相互に作用しあっていたと見るほうがよい。



そんなトムスンの最初の単行本が本書なのだった。初版刊行の1955年は彼が31歳の年に当たるが、モリス研究に踏み込んだのは、1948年にケンブリッジ大学を卒業してリーズ大学附属の成人教育機関の講師となった際に、最初にモリスの著作を授業で用いたところ、「モリスに身も心も取りつかれてしまった」ことがきっかけであったと自身で回想している。20代後半から30代の初めにかけて、モリス論のための調査と執筆に当たっていたこの期間、トムスンはイギリス共産党に所属し、成人教育の仕事と自身の研究調査の合間を縫って労働運動と反戦・平和運動に従事していた。

副題に「ロマン派から革命家へ」とあるように、本書はモリスが青年期にロマン派の詩人や思想家たちの影響を強く受けて、彼らの反抗精神を継承し、それを後半生の社会主義運動家としての展開につなげていった道筋を詳述した書物である。若き日々モリスの内奥に浸み込んだロマン派の反抗精神が消えずに燃えつづけていたからこそ、「東方問題」をめぐるイギリス・ロシア間の戦争の危機が迫っていた1876年に反戦運動に参加し、82年に「火の川」を渡って自身が社会主義者となったことを宣言して運動を精力的に担っていったのだとトムスンは捉える。

初版刊行から22年後の1977年にトムスンは改訂第二版を出した。1956年のスターリン批判とハンガリー動乱を契機にトムスンは共産党を脱退し、前述のようにニュー・レフト運動を担っていった。上記の主著ほかで歴史家として高い声望を得ていた。そうした政治的な立ち位置と学者としての経験の蓄積をふまえて、大幅な加除修正を行ったのみならず、初版刊行以来21年間に進展したモリス研究を概観し、主要な論考にコメントをし、初版に対する各種の批判に応答する長文の「後記」を附している。本訳書はこの改訂第二版を底本とした。私自身、半世紀近く前にモリスの『ユートピアだより』を論じた卒業論文の主要な参考文献として以来、第二版の原書は座右の書でありつづけた。モリス研究における最重要の著作のひとつを（すぐれた共訳者たちとともに）遅ればせながら翻訳刊行することができて、ひとつ肩の荷を下ろした気持ちでいる。（文学部名誉教授）

2025年7月 月曜社発行 769頁 * 図書館目白所蔵、請求記号 309.0233-Tho

ケルムスコット・プレス版エドモンド・スペンサー著『羊飼いの暦』

川端 康雄

ケルムスコット・プレス（以下、KP とも略記する）は1891年春に開設され、1898年春に閉められた。ウィリアム・モリスは1896年10月3日に死去したので、その後に印刷されたKP版については、「印刷者」として立案して企画を決め、オーナメントを手がけていたのもであっても、完成品は見られなかった。53点の刊本のうち彼の没後の本は、今回取り上げる44点目の『羊飼いの暦』以下、10点にのぼる。書誌データは以下のとおり。

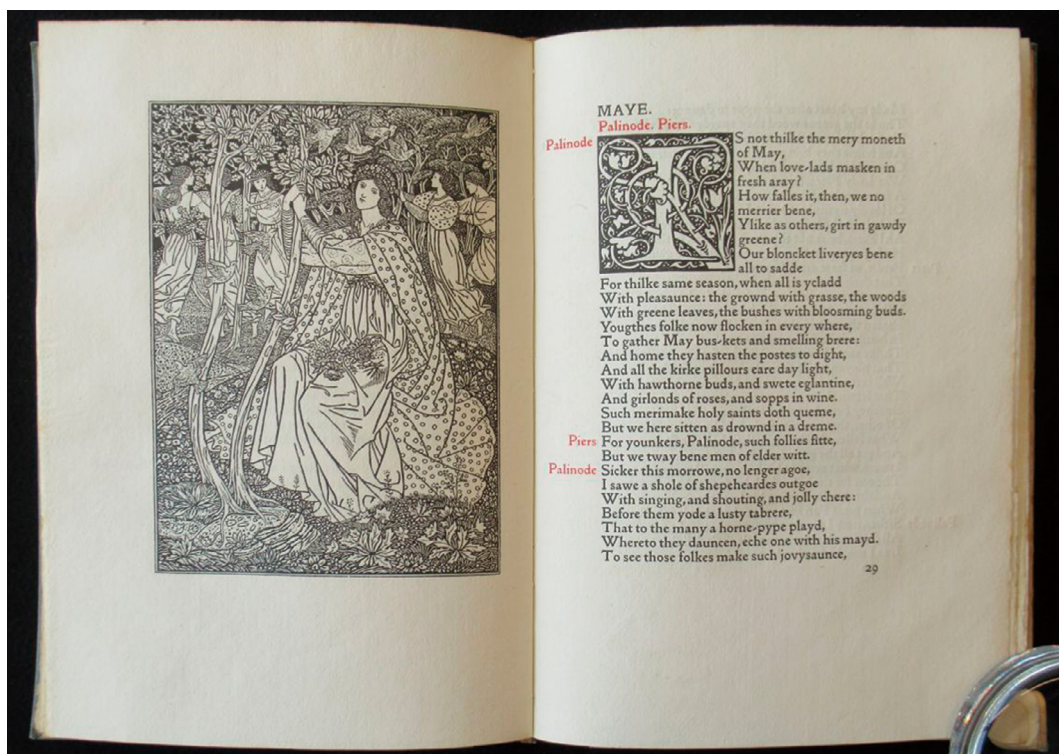
KP 書目第44番『羊飼いの暦——十二か月に対応する牧歌十二篇を含む』（*The Shepherdes Calender: Conteyning Twelve Aeglogues, Proportionable to the Twelve Monethes*）エドモンド・スペンサー著、F・S・エリス編。中型4折判（234×163mm）。112頁。ゴールデン・タイプ。二色刷、挿絵12点アーサー・J・ギヤスキンの画、写真凸版。クォーター・ホランド装。紙刷本225部。ヴェラム刷本6部。奥付日付1896年10月14日。KPより1896年10月14日発売。価格1ギニー（紙刷本）、3ギニー（ヴェラム刷本）。

著者エドモンド・スペンサー（Edmund Spenser, c. 1552-99）は英国エリザベス朝期を代表する詩人の一人。主著は寓意的な叙事詩『妖精の女王』（*Faerie Queen*, 1890-99）で、『羊飼いの暦』は彼の第一詩集である。これは牧歌、すなわち田園の風物を描き、これに関わる神話や伝説を題材にした韻文作品の部類に入る。西欧文学においてこのジャンルはテオクリトスら古代ギリシア詩人に源を発し、ウェルギリウスら古代ローマ詩人をへて、中世からルネサンス、近代にいたるまでの長い歴史がある。モリスの詩作も牧歌との関係は深く、また散文物語『ユートピアだより』の未来社会の叙述も部分的に牧歌の伝統をふまえている。なので（スペンサーへのモリスの言及は、ステンドグラスの主題にする相談を依頼主と手紙でしているぐらいだが）、『羊飼いの暦』もモリスの愛読書であったのだろうと推測できる。内容は、コリン・クラウトほかの羊飼いたちが田園風景のなか、1年間の各月の想いを独白もしくは対話のかたちで述べる。いくつかの月ではコリンの田舎娘（ロザリンド）への片思いの苦悩を歌い、別の月では道徳や宗教について議論したり、エリザベス女王を称えたり、伝説のカルタゴの女王ディドーの死を嘆いたりする。韻律も変化に富む。

KP版『羊飼いの暦』は各月のために冒頭に一頁大の挿絵を載せている。その下絵を手がけたアーサー・J・ギヤスキ（Arthur Joseph Gaskin, 1862-1928）はバーミンガム出身の当時新進の画家だった。1880年代に興隆したアーツ・アンド・クラフツ運動はロンドンを中心にして展開されたのだが、バーミンガムでも市立芸術学校を拠点に活発になっていた。そこに参与していたのがギヤスキ、チャールズ・M・ギア（Charles Gere, 1869-1957）、エドモンド・ニュー（Edmund New, 1871-1931）の三人で、それぞれ書物の挿絵の仕事を手掛けていることにモリスは注目していた。前回、モリスがウォルター・クレインの挿絵の出来に不満を覚えていた次第を述べた。挿絵を附したいKP刊本の企画が多くあって、盟友のバーン＝ジョーンズは本業の絵画制作（とモリス商会へのデザインの供給）で多忙で、すべての挿絵を任せることはできない。それで若手で見どころのある画家を確保したいと思っていた。そこで目に付けたのがこの若手画家たちである。1893年に『ブックセリング』誌に掲載されたインタビュー記事でモリスはそのうちの二人に言及している。

（記者）書物の装飾といえば、バーミンガムの画家たちの新しい派についてはいかがでしょう。（モリス）そうですね。ギヤスキとニューという、理念と独創性を備えた傑出した人物が二人いると思います。とはいえ、その大半は、因襲への反撥というものにもあまりにも隷属的に従い過ぎていますね。

（記者）それを伺うのは、彼らの装飾が本の内容に少しも注意を払わずに使われているように見えるからです。例えば彼らの本でベアリング＝グールドが編んでメッシュイン社から出た『童謡集』がそうです。序文と何ページかの注釈はいずれもきわめて実際的な内容なのに、なんとそれに十五世紀風の縁飾りがついている。変な感じです。



エドモンド・スペンサー著『羊飼いの暦』（ケルムスコット・プレス、1896年）。28-29頁。活字（ゴールデン・タイプ）と装飾頭文字のデザインはモリスの手になる、挿絵アーサー・J. ギャスキンの画（所蔵：日本女子大学図書館）

（モリス）そう、その点では文句を言うべきところが確かにありますが、あのバーミンガムの連中はまだ本領を発揮できていないことを忘れては困ります。（ウィリアム・S・ピーターズ編『理想の書物』川端康雄訳、ちくま学芸文庫、2005年、247-48頁、訳文を一部修正）

注文付きではあるけれども、「バーミンガム派」の若手画家たちへの期待が述べられている。じっさい、モリスは1893年に旧作のロマンス『ウルフィング族の家』の挿絵をギアに、新作の『世界のはての泉』の挿絵をギャスキンの依頼したのだった。ところが、双方が描いてきた下絵はモリスには気に入らなかった。ギアに対しては、下絵の描線が細過ぎてKPの活字にそぐわないとして、再三駄目を出し、手紙のやり取りを重ねたが、モリスの満足のできる下絵は出来上がらず、結局『ウルフィング族の家』はKPから出されずじまいだった。ギアのKPへの貢献は、『ユートピアだより』（KP版、1892年）で使われた、あの馴染み深いケルムスコット・マナーの口絵図版のみとなった。ギャスキンの下絵についても、『世界のはての泉』の挿絵を描いたものの、これもモリスは気に入らず没にし、結局バーン＝ジョーンズに4点の挿絵を描かせてモリスが亡くなる直前にKP版を完成させた。

バーン＝ジョーンズの「視覚的想像力」がKPの活字とデザインとにぴったり合ったがゆえに、その絶対的な基準に照らして、他の画家の作風は受け容れられなかった——ピーターズはそう推測している（『ケルムスコット・プレス』1991年）。『羊飼いの暦』については、死の床についていたモリスに代わってKPを仕切っていた秘書のシドニー・コッカレルと、KPの補佐役の写真技師エマリー・ウォーカーが（モリスの病状を見て、遅延している企画を推進しようということ）で、ギャスキンの下絵を生かして本を完成させたのだった。12点の挿絵は従来の木口木版でなく、写真凸版（process-block）で印刷された。木口木版の彫板にかかる手間と比べて断然時間と労力の節減になるのだが、モリス自身は採用したくなかった当時最新の印刷技法である。むしろバーン＝ジョーンズとは趣が異なるものの、ラファエル前派風に世紀末芸術の陰影表現の風味が合わさって、たいへん魅力的な挿絵となっているように思われるのだが、いかがであろうか。（文学部名誉教授）

文学部×図書館×書店で開く学びの循環

加藤 玄

本学の「学ぶ場」をキャンパスの外へ拡張し、読書・研究・発信の循環をつくる試みとして、文学部、附属図書館、紀伊國屋書店新宿本店のコラボレーション企画をこの夏から実施しています。内容は、学生によるブックハンティングとポップ（POP）の作成・展示、および文学部教員による特別講座の開催です。これまでの実施内容を紹介するとともに、どのような意図でこのプロジェクトを立ち上げたのか、そこに込めた学生の皆さんへのメッセージをお伝えします。

夏季休暇が始まって間もない8月1日、文学部の有志学生が紀伊國屋書店新宿本店の広大な売り場を舞台に「ブックハンティング」を実施しました。ブックハンティングでは、書店の棚に並ぶ本のなかから学生自らの興味関心にもとづいて本を選んでもらいます。選ばれた書籍のうち、本学図書館に未所蔵かつ資料収集方針に合致するものは購入候補とし、大学の蔵書に加えるという取り組みです。参加学生は、裏表紙のバーコードを読み取るハンディターミナルを持って各フロアを回りながら選書を行います。ジャンルにはこだわらず、各学生の「いま読みたい一冊」を探します。選ぶ際には、選定理由もメモします。選書の次に、書店員の方から店頭で読者の目を引くPOPの作り方についてレクチャーを受けました。文字の大きさや配色、視線誘導、アイコン化など具体的に指導していただきます。そして、参加者それぞれが、自ら選書した本のうち印象に残った1～2冊のPOPを作成しました。完成したPOPは書籍に添えて、紀伊國屋書店新宿本店3階のアカデミック・ラウンジにある選書コーナーで期間限定で展示され、その後場所を変えて11月15日まで本学附属図書館で展示されました。書店という「本と人が出会う現場」で、学生が自らの関心を深めるとともに他者への伝え方を磨き、その成果を大学の知の基盤である図書館へ届ける。この循環こそが本企画の核心です。

今回のブックハンティングには、文学部の3学科から学年や関心の異なる学生6人が集まり、自身の専門分野にとどまらず普段目を向けられない分野の本を開いてみたり、書店を歩くことでしか起きない偶然の発見を経験したりしながら、書棚の間を歩き回り、本を手に取りページを繰って比較しながら選定する書籍を決定しました。またPOPづくりを通じて、読者に本の魅力を短い言葉で届ける要約力、キーワードの設定、レイアウトや配色のコツなど、発信に必要な基礎力を身につけました。図書館のエントランスで学生が選んだ書籍とポップを組み合わせ



紀伊國屋書店新宿本店アカデミック・ラウンジでのPOP展示



本学附属図書館エントランスでのPOP展示

展示することで、他の学生には「同世代の目」で選ばれた本に触れる機会が生まれます。自分の選書が大学図書館の蔵書となって、誰かの学びにつながる。その実感は、これからの読書や研究への推進力になることでしょう。

本企画のもうひとつの柱は、紀伊國屋書店新宿本店アカデミック・ラウンジで開催した「文学部特別講座」です。第1弾では、日本文学科の福田安典教授が、平賀源内という江戸時代の有名人を通して近世の知のダイナミズムを語り、知と工夫が社会を動かす力になることを示しました。第2弾では、英文学科の佐藤和哉教授と児童学科の川端有子教授が、学部学科の枠を超えて「児童文学」をテーマに対談し、「好き」を「学び」へ育てる視点を共有しました。第3弾では、史学科の公開座談会シリーズ『饗宴』の特別版として、杉村安幾子教授、水上遼准教授、吉村雅美准教授の3名を中心に史学科教員も加わり、「毒と薬」が人間の歴史に果たしてきた役割をめぐって議論を交わしました。古代から現代までの日本、アジア、ヨーロッパと時代も地域も横断しながら、人文学が社会現象を読み解くさまざまな方法を示すことになりました。いずれの回も、紀伊國屋書店の協力により関連書籍の展示を同時に行い、参加者が関心をさらに深め、将来的には読書会や授業、研究にもつながるように工夫しました。

この特別講座の意義は、教員の専門知に直接触れられることに尽きません。書店という公共空間で、研究の最前線が一般の読者と交わることで、大学の知が社会に開かれる回路が生まれます。質疑応答の時間には、来場者の素朴な疑問や鋭い指摘が教員と学生の双方に新しい視角をもたらしました。図書館は会場で提示された参考文献や関連資料を学内で探しやすくする役目も担っています。動画撮影と取材を行った広報課は、ウェブサイトやSNSで情報をアーカイブして、学内外における知識の循環を促し、より多くの人に知ってもらう役割を果たします。



文学部特別講座 第3弾「毒と薬」の
参加教員（広報課提供）

本企画全体に込めた学生の皆さんへのメッセージは、学問は「推し活」に似ているということです。対象の魅力を知れば知るほど深くハマリ、時間も労力も惜しまず推し活に励むうちに、やがて自分なりの思考が育っていく。文学部はその情熱を学問の言語へと翻訳する場です。ブックハンティングでは「自分の推しを見つけ、その魅力を他者に伝える」という学びの基本を体験的に教えてくれる機会となったことでしょう。また、「選ぶこと」は「問いを立てること」です。書棚の前での逡巡は、情報の海のなかから根拠をもって取捨選択をする訓練です。POPは、「この本の良さは何か」「どの言葉が他者に響くか」という仮説の提示であり、読み手の反応という検証を通じて表現は洗練されていきます。図書館は、その成果を1冊の本と1枚のPOPとして保存し、次の探究へ橋を架けます。さらに、大学の外に広がる「知の現場」である書店は、多様な読者が行き交い、新刊と古典、専門と教養が交差する場です。そこでの出会いは、教室の学びを拡張し、研究の問いに現実の厚みを与えてくれます。特別講座は、学科や専門を越えて語り合うことで、隣接領域へと関心を広げ、将来の学びや仕事の可能性をもひらいていきます。ブックハンティングをきっかけに、自らの関心を端緒に探究し、それを他者へ伝える、ひらかれた学びの循環のなかで学生の皆さんが学問を深めていくことを期待しています。

最後に、今回の企画実施にご協力をいただいた図書館課と広報課の職員の皆さま、紀伊國屋書店新宿本店の皆さまに感謝を申し上げます。学生・教員・職員が一体となって実現した本企画は、学びの喜びを可視化し、大学と社会をつなぐ新しいモデルになりました。次回は、より多くの学生が参加者として、あるいは来場者として関わってくれることを期待しています。図書館の書架で、新宿の書店で、皆さんが、たくさんの「次の一冊」と出会うことを願っています。

（文学部長・史学科教授）

2025年度夏期スクーリング開館について

2025年度の夏期スクーリングは、7月28日（月）～8月23日（土）にかけて行われ、7月28日（月）～8月2日（土）は遠隔授業、8月4日（月）～23日（土）は対面授業が実施された。夏期スクーリング開館は24日間、7月28日（月）～30日（水）は通学課程定期試験期間であったため21：00閉館となったが、その他の日程は平日8：45～20：00、土8：45～18：00の開館時間であった。

夏期スクーリング開館の利用状況

年度	2025	2024	2023
開館日数	24	23	27
入館者数	2836	2773	2638
1日平均	118.2	120.6	97.7
最高	417	494	201
最低	51	54	54
受講者数	1379	1653	1945
登録者数	73	86	102
1日平均	3.1	3.8	3.8
更新者数	63	64	63
来館率	9.9	9.1	8.5
貸出冊数(通信生)	287	361	247
1日平均	12	15.7	9.2
最高	28	52	23
最低	0	0	0
内郵送貸出冊数			0
1日平均			0
最高			0
最低			0
貸出日数	24	23	27
複写枚数	2763	3013	3269
1日平均	115.2	131	121.1
一般学生・教職員 その他の貸出	1064	1239	1,174
1日平均	44.4	53.9	43.5
内郵送貸出冊数		11	6
1日平均		0.5	0.3

注：2023年度以降はスクーリング初日が通学課程定期試験期間と重なり、21時閉館となった。

参考係利用状況（質問処理件数）

年度（日数）	2025(24)	2024(23)	2023(27)
一般学生・教職員	21	15	38
スクーリング生・その他	18	14	23
合計	39	29	61
1日平均	1.7	1.3	2.3

スクーリング開館開始日から3日間は、通学課程定期試験日でもあったため、館内の閲覧席の多くが利用されていた。それ以外の期間は、開館からスクーリング授業の最終時限終了までは閲覧席の利用はまばらであり、夕方から通信生の利用が増える傾向である。特に今年は記録的な暑さが続いたこともあり、短時間立ち寄りというよりは、まとまった時間を確保して来館される方が多かったように感じた。

閲覧席では、ご自身のPCを持参して、周りにたくさんの図書を積み上げて熱心に勉強している様子を多く見かけた。一方で、持参されたPCの不具合や未設定により、予想外の時間をとられて慌てている方もお見かけした。ご自身のPCの設定やトラブルについては図書館では対応していないため、時間に余裕をもってご来館いただくと安心である。

スクーリング開館中は、図書の探し方、OPAC検索の方法への問合せが例年通り多かったが、慣れた様子で図書を手に取っている通信生もあり、普段から図書館を利用されている様子も伺えた。何気なく眺めた書架で素敵な図書に出会うかもしれない。是非普段から図書館を利用してもらいたいと思う。

（館員・閲覧・西生田保存書庫係 南木香織）



編集後記 文学部6名の学生さんが選んで本学の蔵書に加わった書物が、今秋の読書週間と時を同じくして、当意即妙な手作りのPOPと共に展示ケースを飾った。新たな蔵書に早くもたくさんの反響をいただいている。多くの学生の皆さんにお読みいただけたらと思う。目白通りの銀杏が色づき始めるこの時期は、本学では防災訓練の時期でもある。図書館でも地震や火災への備えに今いちど気を引き締める。地震が起きたら本が落ちると心得て！利用者の皆さんは、いち早く本棚から離れて身を守ってください。（水嶋）

2025年度編集委員：水嶋寿恵、鈴木学、南木香織